

乱暴な幼児の心理治療と発達

こどもクリニック

石川 丹

I. 初めに

就学前の幼児は4～5歳には次のような発達に達しています。

「教えてあげる」と言いながら子ども同士で教え合いっこをする。二つの行動プランを並列的にすることができる。例えば、テーブルの上の右の方ではブロックで車を作りながら、一方では左の方で紙をはさみで切って貼り絵を作ったりすることができる。つまり、交互に二つのことを同時進行で出来る。仲間の性格特性が分るようになって、例えば、乱暴な子には近寄らない。人は時に感情と表情が一致しないことがあることが分る。本音と建前の区別が分り、本音を抑制して折り合いをつけることができる。自分に言い聞かせることができる。他人の立場で物事を考えることが出来るようになる。

先を見越して待てる。我慢できる。

こうした発達段階に達して、多くの仲間の中で、自己主張し、交渉し、折り合いをつけ、お友達を尊重し、尊重され、学び合いっこしながら、好ましい世渡りの仕方ができるのが4～5歳児の発達の姿です。4～5歳児は社会性が育ち、自己コントロールが可能になります。他人の立場で考えることを、他者視点と言いますが、この他者視点も4～5歳ごろには育つものです。

さて、乱暴な幼児でどうでしょうか。そういう子は上記の4～5歳ごろには達成されるはずの社会性が未熟なために、どうしても自己主張が先に立ち、しかも自己主張を言葉ではなく行動でしちゃうため、お友達と和気あいあいというふうには行かない、ということになるのです。

乱暴な子は、自分を外から見て自分と他人との違いが分かって、お友達の立場で考えてお友達の気持ちが分かるようになると、つまり、他者視点が育つと、乱暴行為が減って来ます。自分を省みて、他人への思いやりが育って来るからです。

以下に、乱暴が減った一人の子の育ちを紹介します。プライバシー保護のため一部事実と違う書き方をしてありますが、話の趣旨には影響しないようにしてあります。

II. 乱暴なA君

1) 初診時4歳3ヵ月男児。

お母さんの訴えは、落ち着きが無い、「うるせえ」など暴言を言う、お友達を突き飛ばす、言葉が幼い、です。

心理発達検査によって、本児は、言葉で表現すること、お絵描きや細かい手操作、他人の立場で考えること、つまり他者視点、が苦手であることが分かりました。

また、得手と不得手の差が激しいことも分かりました。得手不得手の差が大きいということは、得手にはまれば上手に出来ますが、不得手な場面に遭遇すると「どうしようどうしよう」という気持ちが先に立ち、オロオロしてしまい、ますますうまくやれなくなってしまうことがしばしばあるということになります。

2) 母親へ提案した対策

乱暴行為を減らすことを目指して、母親には以下のような心理治療法を提案しました。

a) 二つ先のアナウンス

見通しが立ち易くなるような関わり方をすること、つまり、常日頃からA君に対して二つ先の行動予定をこまめにアナウンスして、予想通りで満足という気持ちを形成するように勧めました。

b) 「だめ」から「～しよう」へ

A君は「だめっ！」という禁止の声掛けをされることが多くなっていますので、A君はしょっちゅう駄目を出されることが多いという感じが強くなっています。ですから「だめっ！」に対してピリピリと過敏になっていて、「だめっ！」と言われると返ってカーッとなってしまうことが多いはずで、そこで、「だめ」の代わりに「～しよう」とA君にして欲しい行動を具体的に言って示すようにして、「だめ」を減らすように提案しました。

c) オッケーの声掛け

何時ものように普段通り出来た時、「オッケー！ 出来たね。うまく行ったね。またやろうね。」と声を掛けするように奨励しました。こうした声掛けをたくさんすると、A君にしてみれば、母さんに認めてもらえた、褒めてもらえたというふうに思うことが増えて、良い気持ちが増え、心が安定するようになり、つい手が出るのが減ります、と説明しました。

3) 事件

4歳7ヵ月になって、お友達がふざけあっているのを見て「止めて来る」と言って近づき、結果的にスコップで叩いて怪我をさせてしまった、という事件が起きました。

お母さんは大変困ってノイローゼ気味に成ってしまったため、落ち着きの出る薬を処方しました。

4) “お話し聞くタイム”療法

A君が苦手としている他人の立場で考えること、他人の心の状態を推し量ること、つまり他者視点の発達を促すために、母親に“お話し聞くタイム”療法を提案しました。これは思っていることを言葉で言えるようになるための練習であります。

“お話し聞くタイム”というのは、母親がヒントをどんどん出しながら問いかけ、子どもに幼稚園での出来事を思い出してもらい、上手に思い出話が出来るようにする練習です。その日にした自分の行動、つまり過去を思い出して言葉にする練習です。

「何したの？」とか「どうしたの？」など5W (What, Why, Where, When, Who) 1H (How)の質

問をすると、子どもは答えに詰まってしまって、すぐ「忘れた」と言ってしまって、話が滞ってしまうので、「～したんだっけ？ ～だったっけ？」など。2択ないし3択問題にして、子どもが答え易くなるような質問をします。

「次は～だったんだっけ？」というふうに、子どもがやっついそうな推測を踏まえて「～」と具体的なヒントを出すと、子どもは思い出し易くなって「そうそう、～した。」とか言えるようになって思い出話に花が咲くようになる、というわけです。

お母さんはその日にその子が遊んでいたことをあらかじめ幼稚園の先生に聞いておいて、言わば、凶星のヒント、を出してあげても良いのです。目的はクイズではなく、思い出してもらおうことだからです。

子どもが好ましい行動をしていたら母親は「上手く出来たんだね。」と褒め、母親がして欲しかった行動があったなら「～すると良かったね。」と励ましながら、話が広がるように促します。

これを繰り返すと、自らの行動を振り返る練習になり、言葉にする事によって記憶力も付き、仲間の気持ちをも推測できるようになります。その結果、他人の心を読むこと、自らに言い聞かせること、が出来るという4～5歳児の知恵が達成されるのです。

5) 「お父さん、遊ばれて下さい」

落ち着きの出るはずの薬は効果が出ず、乱暴行為が続くためお母さんの焦燥はさらに進みましたので、精神安定薬に変更しました。

お父さんは幼少時にはA君以上に乱暴だったとのことでしたが、お母さんが焦燥していることを大変心配していましたので、お父さんにも協力してもらうことになり、受診してもらいました。

お父さんをお願いしたことはまず、A君に遊ばれて下さい、です。つまり、A君の好きな遊びに付き合っ、A君のリーダーシップに任せ、お父さんは言い成りになって遊ばれてやって下さい、とお願いしました。

父子共に好きだというサッカー、戦いごっこ、プロレスごっこを定期的に時間を決めてする、つまり“何時もの時間に、何時もの場所で、何時もの楽しみ”を作って遊び、予定通りで満足満足、という気持ちを作ることをお父さんに説明しました。また、ごっこという空想遊びの中で、他人になったふりをしながら他人の立場で物を考える練習をしてもらうこと、も提案しました。

後日のお母さんの話によれば、お父さんをこれらのことを一生懸命やってくれているとのことでした。

6) 4歳8ヵ月以降の良い発達

良い徴候が見られるようになりました。例えば、友達にやり返されると「叩かれた」と先生に言葉で訴えるようになりました。また、座っていない子がいると先生に言いつけたり、「ちゃんとしなさい」と言って言葉で注意するようになりました。これらは他児に教えて上げるという4～5歳児の意識が発達して来たことを意味し、好ましいことでもあります。

4歳10ヵ月になると、行動は目に見えて穏やかになりました。以前は出来ないと怒ってすぐ止めてしまっていたブロック遊びを「難しいな」と言いながら続けるようになったり、お友達を誘って断られると前はすぐ叩いていたのですが「じゃあ〜」と言って他の子と遊ぶようになりました。以前は進行方向にいる子を突き飛ばしていましたが、人が居たら除けて走るようになりました。また、「〜が叩いた。ダメだね。でも僕はやらなかった」と自慢げにお母さんに報告するようになりました。

お母さんは、乱暴はひどい時の半分に減った、と喜びました。

7) 想像力の進歩

5歳0ヵ月になると、お母さんは「うちの子変になった。」と青い顔をして受診して来ました。

トン君と名づけた架空の友達がそこに居るかのように振る舞い、「トン君食べる？」とか言ってお菓子を渡すふりをしておかしい、とのことでした。お母さんはおかしいと言っ来ましたが、これはすばらしく良いことです、と以下のように説明しました。

想像力や空想力が発達して来て、一人二役を演じられるようになったのだから良いことなのです。頭の中に架空の人物を想像してる訳ですから、その人と会話することによって思考が深まるはずです。大抵の大人は頭の中に善玉と悪玉が居て、例えば千円札を拾ったら、善玉は交番に届けろと言い、悪玉は交番に届けなくて自分の物にしてしまえと言い、迷うことがあるわけです。この子はそういうことを頭の中でやり始めたことになるので良いことなのです、と。

5歳2ヵ月、問題となるような乱暴行為はほとんどなくなり、親友もできて仲良く遊べるようになりました。

8) 他者視点の進歩、自己コントロールの発達

5歳5ヵ月、持っていた箸が他児の顔に当たって出血させてしまいました、すぐ「御免ね。」と謝れました。

5歳6ヵ月、幼稚園の年長さんになり、トン君との会話はA君が疑問を發し、トン君が解答を言う形になりました。これは、内言語による自己説得、つまり頭の中で自己コントロールができるようになる直前の発達段階に相当するので、さらに良いことと言うことが出来ます。

仮面ライダーごっこでは演じるキャラクターを次々変えて何役もこなすようになりました。一人二役レベルではなく、何役もこなすようになったということは、いろんなキャラクターの立場で考える練習をたくさんしていることになりますので、他者視点が広がっていることを意味し、さらに良い発達になって来たということになります。

5歳8ヵ月、思い通りにならないことがあると先生と二人で“愛の小部屋”と名づけた空き教室に行って過ごし、自ら「落ち着いた」と言えたら、出て来てまた友達と遊ぶような行動を取れるようになりました。これも自己コントロールがだいぶ出来るようになったということでもあります。

友人に叩かれてもすぐに叩き返さず、先生に言い付けに行ったり、帰宅後「叩かれたけど、やり返さなかった。偉いでしょ」とお母さんに言葉で報告できるようにもなりました。

5歳9ヵ月、帰りの会で並ぶ際、一番に成りたくて走って行って小さな子にぶつかって鼻血を出させてしまったり、友達に注意されると暴言を吐いたり、すれ違いざまに手が出たりなど、心配な行動がありましたが、5歳10ヵ月になると、大きなトラブルはなくなり、就学間近の6歳4ヵ月には注意されても手が出ることは無くなりました。

III. 考察

A君の乱暴が減った原動力としての発達の姿は以下の通りです。

友達にやり返されると「叩かれた」と先生に言葉で言うようになった。座っていない子がいると先生に言いつけたり、「ちゃんとしなさい」と言って言葉で注意するようになった。以前は出来ないと怒ってすぐ止めてしまっていたブロック遊びを「難しいな」と言いながら続けるようになった。お友達を誘って断られると前はすぐ叩いていたが「じゃあ、～君」と言って他の子と遊ぶようになった。人が居たら除けて走るようになった。「～が叩いた。ダメだね。でも僕はやらなかった」と自慢げにお母さんに報告するようになった。トン君と名づけた架空の友達がそこに居るかのように振る舞い、「トン君食べる？」とか言ってお菓子を渡すふりをして、想像の世界で遊ぶようになった。トン君との会話は本A君が疑問を発し、トン君が解答を言う形になり、一人会話が出来るようになった。仮面ライダーごっこでは演じるキャラクターを次々変えて何役もこなすようになった。思い通りにならないことがあると先生と二人で“愛の小部屋”と名づけた空き教室に行き行って過ごし、自ら「落ち着いた」と言えたら、出て来てまた友達と遊ぶような行動を取れるようになった。友人に叩かれてもすぐに叩き返さず、先生に言い付けに行ったり、帰宅後「叩かれたけど、やり返さなかった。偉いでしょ」とお母さんに言葉で報告できるようにもなった。

以上のような経過から、他者視点が育ち、乱暴行動が言語行動に変化し、自己コントロールが上手になったので乱暴行為が減った、というふうに発達心理学的に説明できます。

こうした発達を促したのは、お母さんによる、二つ先のアナウンス、「だめ」から「～しよう」、オッケーの声掛け、“お話聞くタイム”であり、また、お父さんがたくさん遊ばれてくれたことにもよります。

もちろん通園施設や幼稚園の先生方のご協力の賜物であったことも間違いありません。

お母さんお父さんがうまく頑張れたと言うこともできましょう。